2011 年度　修了

人間にとって深いところとは何か
―ユングのペルソナを手掛かりとして―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
深田　金嗣

どのような論文を書くにも、まずその意図するものが何であるかを明らかにしなければならない。その次に決しておろそかにできない大切なことは、現代という社会の時代認識である。特に人間に関する学問、心理学はそのものの性質上、社会的な背景やそれに対する洞察がなければ全く意味がなくなってしまう。

“人間にとって深いところとは”という大きな問いに近づくために、まずユングの集合的無意識と元型というユング独特の理論を考察する。ユングは人間の心を単に意識と無意識の層に分けるだけではなく、無意識の層をさらに個人的な層と普遍的な層に区別し、そのことから人がそれぞれにとって必要不可欠な、外的な部分に対する防御本能であるペルソナを思いつくのである。ペルソナは現実に対する自我の防衛機能を果たすものであり、無意識の意識への同化の過程の中から生れていくものである。ペルソナについて、まず一般的な考え方、そしてユングのそれを詳述し、つづいて日本の思想家の考え方についても考察する。特に日本においては表と裏の概念があり、それはペルソナとゼーレの関係と等しく、両者は相互に密接に関係しているが、ゼーレという無意識がオモテという自我に現れてくる時、そのオモテは心そのものに繋がり、ペルソナは無意識の心そのものになる。

つぎに、ユングの個性化過程におけるペルソナについて考察するが、この中の「自己」という概念は“人間の深いところとは”のひとつの答えであり、ユング心理学のおおきな到達点である。本論では、「個性化の道には二つの重要な要素があり、一つはペルソナへの外的な方向性、もう一つは集合的無意識の内的な方向性である。内的な方向性の中心に個性化が目指すものがあるという。これこそがユングのいう最も深い部分、すなわち「自己」である、」として議論を深めていく。

この論文の結論に導くものとしてさらに、ライフサイクルについて私自身の仮説を述べている。「劇的に変化する現代社会において一番影響を受けるのはやはりペルソナであろう。ペルソナが社会の劇的な変化にうまく対応していけるかどうかは、とても難しい問題である。適度にペルソナを対応させるためにはどうすればいいのか。それはやはり人間の一番深いところ、すなわち元型（集合的無意識）との交信にかかっているのである。では交信とは何か。　＜中略＞　人間の営みによる交信の手段によって、人間は適度にペルソナを外的な変化に対応させるとともに、同時に内的な方向性の中心にある「自己」を目指すことになる。個性化とは、その「自己」に向かうプロセス、繰り返し反復されるプロセスにほかならないのである。」と結論付けてこの論文を結んでいる。